

令和2年度第2回ゼニガタアザラシ科学委員会

議事要旨

令和3年2月3日(水)9:00~12:30

会場:TKP 札幌ビジネスセンター赤レンガ前 5F「チューリップ」

議事1：令和2年度第2回えりも地域ゼニガタアザラシモニタリングの方法に係る作業部会の検討状況報告について

事務局より資料1-1「令和2年度えりも地域ゼニガタアザラシモニタリングの方法に係る作業部会の検討状況」について報告し、個別の内容について別途資料を基に説明・報告し意見を求めた。

(1) 音波忌避の取り扱いについて

(主な意見)

- ・ なし

(今後の方針)

- ・ 保護管理協議会において説明し、事業を一時中断とする。

(2) ドローンによる生息数調査の手法確立について

(主な意見)

- ・ 現状でドローンを飛ばす事でアザラシが逃げることが多くないのであれば良いが、波がなく静かな時にドローンを飛ばすと逃げってしまう状況が多くなった場合には考慮が必要。

(今後の方針)

- ・ 来年度もできる条件の時には季節を問わずドローン調査の実施に努める。
- ・ 引き続き、過去のデータやパラメータの整理を行い、繁殖期と換毛期の発見率の推定を場所ごとに行う解析等を実施するなど、効率的なモニタリング方法を検討する。

(3) 漁業被害調査について

(主な意見)

- ・ サケの不漁などで漁業自体がダメージを受けている可能性がある。調査の内容をゼニガタアザラシに絞ると解析が難しくなるので、今の漁業の現状もアンケートに加えるべき。
- ・ 庶野地区もタコ漁の被害があるので、ゼニガタアザラシによる被害があると思われるエリアをもう少し調査範囲に含めた方が、被害の度合いの比較ができる。

(今後の方針)

- ・ 来年度、専門家の意見を踏まえながら、作業部会にて詳細を決定し、科学委員会へ報告する。

(4) 捕獲幼獣個体数の成獣個体数への換算割合について

(主な意見)

- ・ メスの繁殖能力が高齢個体と若齢個体で同等という仮定が入っているが、先行研究のデータはないのか。
→ えりもの捕獲個体のサンプルからはその年に繁殖したかは分かるが、それ以前の繁殖状況は分からない。加えて、高齢個体は捕獲しにくいので検証はできていない。
→ 捕獲個体が幼獣に極端に偏っていれば、10年20年後に個体群への影響が出るが、少なくとも10年間くらいでは影響はないと思われる。幼獣を多く捕獲することは、成獣も含めてまんべんなく捕るよりも個体数の減り方は少ないが、捕獲頭数枠を見直すほどではないというのが作業部会での結論である。

(5) その他

(主な意見)

- ・ 現場では上陸個体数が減っていると感じているが、原因は不明である。現在の個体群シミュレーションとは別の遺伝子による個体数推定のための調査を提案したい。
→ 上陸個体数が減っているのであれば、今のモニタリング結果から試算することができる。まずはその結果を検証し、これまでの調査で見えないものがあれば、他の方法での調査を行うことになる。他の方法での個体数推定も欲しいというのは当然だが、上陸個体数の減少の検証とは別の話である。
- ・ 個体群シミュレーションの中で、調査主体の異なる3つの時系列データの発見率を補正しているので、本当に減っているのかどうか検証する必要がある。また、データが過去と現在で同じクオリティなのか、同じバイアスがかかっているのかも併せて検証する必要がある。これらの補正係数の検証と独立した資源量推定値が必要で、バイオプシーを使えば上陸率や発見率の補正が不要になるので、絶対値としての資源量推定値が得られる。

議事2：令和2年度事業実施結果及び令和3年度事業実施計画について（資料2-1）

■令和2年度事業の実施結果について

事務局より資料2-1「令和3年度（2021年度）環境省えりも地域ゼニガタアザラシ管理事業実施計画（案）」について説明し、意見を求めた。

(主な意見)

- ・ 図13について2種類の調査結果が混ざっており、注釈をきちんと付けたほうがいい。
- ・ 捕獲実績は定置で既に44頭、しかも亜成獣・成獣の捕獲率が良くなっているという事は、今後の捕獲見込みとして技術的には達成していると考えていいのか。

→実感としては、技術的に確立したということではなく、条件によってたまたま捕れたということが多かったと考えている。(事務局)

(今後の方針)

- ・ 実施計画案の修正及び図 13 について注釈を追加する。

■2020 年度環境省ゼニガタアザラシモニタリング調査の結果報告

今年度の環境省請負業務の生態モニタリング調査について報告を行った。

(主な意見)

- ・ 上陸個体数の調査について、大学のボランティア的な調査で政策に重要な数を出してもらう事の限界が来ている。モニタリングは統一性と継続性が重要である。
→ドローンでの調査と目視調査の比較を現在行っており、それをモニタリングに使えるよう課題を解決していくことが重要。(事務局)
- ・ 漁業被害は漁獲量が少ないと相対的に被害割合が大きくなるので、表示する場合には被害量の絶対値も一緒にプロットしたほうがよい。
- ・ 個体数管理を個体の質で考えると、定置網で捕獲する方が、漁業被害を与えている個体であることから比重が大きいのが、その重み付けをした形での個体数管理は可能なのか。
→漁業被害を減らすという元々のコンセプトに戻って考えるのなら、実際の捕獲もシミュレーションの仮定のようにする努力が必要である。
- ・ 今年度成獣が定置網で比較的多く捕獲できたということで、来年度捕獲を実施した定置網において被害軽減効果があるかは非常に重要であるので、検証して欲しい。

議事 3：令和 3 年度事業実施計画（案）について（資料 2-1）

事務局より令和 3 年度(2021 年度)事業実施計画案及び令和 3 年度事業実施計画における個体群管理(捕獲方法別捕獲数)の考え方(案)について説明し、意見を求めた。

(主な意見)

- ・ 前年度の定置網でやる捕獲数がある程度目途が立ったのであれば、来年度計画の中で春網の段階で刺し網を使った捕獲と言うのは危険ではないか。定置で捕獲するのが先で、数が不足した場合翌年春の刺し網を使うという個体数調整であったはず。
→漁業者と合意できる案にしてはどうか。刺し網で捕って、肝心の定置網がまだ捕れそうなのに捕獲をやめるのは本末転倒である。定置網で捕獲枠を超えた分を翌年の捕獲頭数から減らせばよい。
- ・ 混獲数はシミュレーションに入っているのので、データを出して欲しい。
- ・ 地元への説明があるのなら、なるべく定置で捕って残りを刺し網で捕るのがよい。
→今年、定置網での捕獲で 44 頭捕れたのは好条件が重なった結果で、特殊な状況だったと考えている。ある程度の数を刺し網で捕って、妥当な数を定置網で捕る事を目指すのが、地元としても受け入れやすいと思われる。(事務局)

(今後の方針)

- ・ 本委員会後、協議会座長の桜井委員と事務局で、案を整理し、科学委員会委員へ共有する。

(事業実施計画案に関するその他の意見)

- ・ 遺伝子による個体数推定も同時並行で実施してはどうか。
→作業部会で過去のデータも含めて検討し、緊急性があればやってもらいたい。

(今後の方針)

- ・ 委員より予算や労力などの概算をご提案いただき、上陸個体数等の既存データの整理も含めて、作業部会で検討する。

議事4 その他

事務局より、アザラジジステンパーの調査検討と情報収集について報告した。

(主な意見)

- ・ 陽性コントロールが必要なので、国立感染症研究所からサンプルを取り寄せているところである。入手次第検査を行う。
→抗体検査もゆくゆくは検討いただきたい。
- ・ 今回の検査用としては、本来は全血より血しょう・血清が適している。

(今後の方針)

- ・ 検査結果を検証し、検査体制の確立に努める。併せて、情報収集により現状把握に努める。
- ・ 小林委員より血しょうサンプルを坪田委員へ提供する。

(その他)

- ・ ステイタスレポートの進捗について、事務局より目次整理中である旨と今後主筆の担当について相談したい旨、回答した。目次案ができ次第、委員へ共有することとなった。